第 63 回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

白百合学園中学校 2 年
内藤 こころ

課題②

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。

副題

核兵器のない当たり前

週に一度はニュースで耳にする「核戦争」という言葉。ほぼ毎月飛んで来るミサイル。これらは、私達にとって核兵器が決して遠い存在ではないことを思い出させ、私達の恐怖を煽っている。だから人は、「核兵器が無くなればいい」と言う。確かにそうすれば、私達が脅かされることがなくなる。そして、核兵器が外交においての恫喝となり、平等な関係を築けないという問題も解消できる。しかし、果たしてそれは、実現可能なのだろうか。

私はこの夏、アメリカのロサンゼルスで開催された模擬国連のプログラムに参加した。その際、国連総会のシミュレーションを三回行ったが、その中で、核廃絶に関するトピックもあった。非核兵器国である日本に住んでいる私は、核保有国が核を所持し続ける理由を考えたことがなかった。しかし、今回のプログラムでは、アメリカの居住歴が長い人が多く、私とは反対に、核兵器があることが当たり前と言う人もいた。もちろんその人は、核兵器の使用に関しては反対意見も持っていたが、なぜ保有し続けるのかということに対する見解は、私にとっては新鮮で、とても興味深かった。彼らは、今まで保持してきた核兵器を捨てても、自国にとってはメリットよりもデメリットの方が圧倒的に多いからだと言っていた。核で威嚇し合うことがなくなるというメリットがあるとはいえ、今まで開発してきた物を捨ててしまえば、開発にかけた何十年もの時間、何兆円もの費用、何千人もの努力は全て、一瞬にして水の泡だ。しかし一方で、シミュレーションでは、核保有国の代表使節の多くが、核を持っていても使うことに対しては前向きではないという意見を発表していた。私はそこで、矛盾を感じた。核兵器を持っていても使わないのなら、捨ててしまってもいいのではないか。なぜ使わない物を持ち続けているのか。「使わない物を捨てない」という言葉には聞き覚えがある。断捨離だ。断捨離という私達に身近な例に落とし込んで考えてみようと思う。人にもよるとは思うが、私も含め、断捨離が苦手な人の多くは、使っていない物でも、それが無い生活に不安を抱いてしまう。でも、それがある生活が当たり前になっているから捨てるのが怖いのであって、無くても本当は不便ではないし、困りもしない。つまり、それが無い状況を当たり前にしてしまえば、それを求めることはなくなるのかもしれない。それなら、核兵器も、無いことが当たり前にしてしまえば、誰も必要とすることは無くなるのではないか。だから、どうすればそれを当たり前にできるのかが分かれば、核兵器のない社会に近づけると思い、考えてみた結果、私の中で一番良いと思った答えは、核兵器について考えることだ。現在、地球上に核兵器が存在することは誰もが知っているから、それが皆にとっての当たり前だ。でも、核兵

器が実在する状況で、存在しないことを当たり前にするのなら、考えることしか手段はないと思う。具体的には、子供達だけではなく、未来に健全な地球を残す義務のある大人達にも、「核兵器がある世界とない世界のどちらがいいか」という事を真剣に考えてもらうことだ。どちらの方がより多くの人を幸せにできるか。そこで選んだ答えを実現させるのは、誰にとっても当たり前なのではないか。

現状を見ること以外にも、人の「当たり前」を作る方法がある。それは、理想を描くことだ。世界中の誰もが理想とする「平和な社会」を思い描けば、その社会を追い求めることが皆の当たり前になる。そうすれば、核兵器がないことが当たり前になり、誰も求めることはなくなるのではないか。

「当たり前」は変えることができる。私は新しい当たり前で平和を願う。